

あとがき

『漫画「天地を翔ける」制作にあたって』

帰家 圭吾

一 漫画「天地を翔ける」について

(一) 漫画制作を始めるきっかけ

この度、漫画「天地を翔ける」を制作させていただきました。当初、江馬氏館跡庭園をもっと多くの人たちに知ってもらう為の利活用方法を検討する会議で、江馬氏の漫画を制作したらどうかと提案させていただきました。

というのも江馬館を訪れる方々は、①史跡巡りをしたり歴史研究調査をしたりしているような上級者、②日本史、特に戦国時代が好きな中級者、③歴史にあまり興味が無いけど道の駅から近いから何となく訪れてみた初心者、の大きく三つに分けられると思います。予測ではありませんが、来場者は③、②の順番に多く、①に至っては一握りではないかと思えます。上級者の方には、江馬館の魅力や価値などを充分理解していただけたと思いますが、残りの方に理解してもらうことはとても難しいことです。

そこでNHKの大河ドラマのように、一人の戦国武将に焦点を当てて、その生涯をストーリー仕立てにして紹介することで、まずは江馬氏に興味を持ってもらい、その上で歴史的価値を説明することにより理解を深めてもらえるのではないかと考えました。

また地元に住む子供たちに、自分の町のお殿様はこんな人だった

と理解してもらうことは、将来的に非常に大切なことだと思います。ただ自身の少年期を思い返しますと、恥ずかしながら活字は大の苦手、図書館では漫画ばかり読んでいました。そういったことも踏まえて、より多くの人に楽しんで読んでもらい、少しでも興味を持ってもらえるように漫画を制作させていただきました。

(二) 史実、伝承、物語について

いざ江馬輝盛を主人公にした漫画のストーリー制作を開始したのですが、すぐに壁にぶつかることになりました。江馬輝盛は敗戦の将で史料が乏しく、史実として残っているのは、上杉武田に分かれて父と対立したことや八日市の戦いで討ち死にしたことぐらいでした。「史実」とは、史料・歴史文書・定説と合意などから、歴史上の事実とされている事柄です。江馬氏に関する資料や文献はあるのですが、史実と認定されるのは難しく、あくまで伝承や物語という扱いになります。

かといって史実だけでは、味気のない作品になってしまいます。様々な文献や資料を参考に、歴史の本筋を外れないように注意しつつ、多くの人に楽しんでもらえるようなストーリー構成を学芸員に相談しながら考えました。異論やご指摘もあるかとは思いますが、江馬輝盛を主役とした物語として、ご覧いただければ幸いです。

(三) タイトル「天地を翔ける」について

江馬輝盛は、武田、上杉、織田などの戦国時代を代表する大名に囲まれながらも、情勢に応じて味方に付く相手を代えながら生き抜いて飛騨統一を目指しました。武田・上杉の両雄のイメージとして「天地」、飛騨の「飛」の文字から「飛翔」をイメージして「天地を翔ける」というタイトルを付けさせていただきました。

私自身、元々戦国時代が好きで企画したのですが、文献などを読む中で初めて知ることも多く、歴史を学ぶことの面白さを改めて体感できました。皆さまにも、漫画「天地を翔ける」を読んで江馬氏や郷土の歴史に少しでも興味を持っていただければ、これほど嬉しいことはありません。

結びに、漫画制作に関わってくださいました皆様に感謝を申し上げて、あとがきとさせていただきます。

二 戦国あとがきうわさばなし

(一) 東町城跡(神岡城)

東町城は、作中に出てくる武田の家臣、山県昌景が越中侵攻の拠点として江馬氏に築かせたと言われています。現在の神岡城は、昭和四十五年(1970年)に三井金属鉱業株式会社が神岡鉱業創業百周年を記念して、現存する石垣に模擬天守を建てたものです。

(二) 薪能「藤橋」

薪能「藤橋」は、江馬時盛と妻の明石が輝盛の策略により殺され、成仏できない明石の霊を一人の僧が夜通し経を読み成仏させ、明石が御礼に舞を披露するという江馬氏を舞台にした物語です。

(三) 江馬輝盛の墓と江馬殿切腹石

高山市国府町に安国寺の僧が建てたという輝盛のお墓があります。また輝盛の息子、江馬時政が父の死から三年後、金森長近の軍に参加し、三木氏を倒し父の仇を取りますが、領土を返してもらえませんでした。そのことに不満を抱き、一揆を起こしますが失敗し、父のお墓と同じ場所で切腹しました。その時に腰かけたという石があります。その石に触れると災いが起きるそうです。

(四) 十三墓峠(大坂峠)

八日市の戦いの後、江馬氏の重臣河上縫殿助など十三人の家臣が後を追って死んだとされ、農民たちが霊を慰める為、お墓を建てたと言われています。

(五) 江馬貞盛の墓と犬石

作中には登場しませんが、江馬貞盛という輝盛の弟がいました。輝盛とは不仲で、殺害されるのを恐れ能登へ逃亡する最中に笈破地区にて凍死して墓が建てられました。その時、飼っていた愛犬が貞盛の死を悲しみ鳴き叫ぶうちに石になったという犬石があります。その集落は犬石村と呼ばれ、その後、伊西村となったといわれています。

(六) 江馬氏と鉱山

神岡の鉱山は、輝盛の死後、金森長近の命令で茂住宗貞が採掘したという史料があり、鉱山と江馬氏の関係性を示す資料がありません。しかし江馬氏は戦で多く兵を出したという記録もあり、それを賄う財力を考えると、すでに採掘をしていたのかもしれませんが。

(七) 金森重勝

高山藩二代目藩主の金森可重の側室で五男・重勝の母が江馬輝盛(または河上縫殿助)の娘という説があります。重勝は、父と共に大阪の陣に出陣し、その後、高原郷三千石を分与され、旧神岡工業高校の敷地内にお屋敷があったそうです。もしそうなら孫の代で、念願の高原郷に戻ってこれたことになります。

【参考文献】

神岡のむかし話

江馬三枝子『飛騨の民話』

川口半平『濃飛戦国武将伝』

葛谷鮎彦『中世江馬の研究』